令和２年度研究発表会のご案内



研究主題

粘り強くともに学ぶ子どもの育成（３年次）

期　　日　令和３年２月19日（金）１３：２５～１７：００（受付１２：４０～）
20日（土）　９：００～１５：５０（受付　８：１５～）

会　　場　熊本大学教育学部附属小学校

内　　容　各教科等の授業公開・分科会・講演

申込用 QR ｺｰﾄﾞ

※感染症拡大等の状況により，開催形態を変更する場合がございます。変更が生じた場合は，本校 HP にてお知らせいたします。

講　師

京都大学 准教授　石井 英真 先生

京都大学大学院教育学研究科　　准教授　博士（教育学）
神戸松蔭女子学院大学人間科学部准教授などを経て現職。

著書『未来の学校　ポスト・コロナの公教育のリデザイン』（日本標準）
『授業づくりの深め方：「よい授業」をデザインするための５つのツボ』（ミネルヴァ書房）
『中教審「答申」を読み解く』（日本標準）
『今求められる学力と学びとは　―コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影―』（日本標準）
『小学校発　アクティブ・ラーニングを超える授業　―質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業―』（日本標準）
『授業改善８つのアクション』（東洋館出版社）など



附属小学校ホームページのご紹介

新しい
コンテンツ
続々登場!!

- 授業研究最前線　臨場感あふれる各教科の取り組みを随時更新します。
- 実践・研究ブログ　校内で行われた最新の授業実践が掲載されます。

ホームページ　https://elem.educ.kumamoto-u.ac.jp　熊大附属小　検索



©2010熊本県くまモン

熊本大学教育学部附属小学校　研究だより VOL.56

発　行　日　令和２年10月１日
編集・発行　熊本大学教育学部附属小学校　〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5-12　TEL 096（356）2492　FAX 096（356）2499

令和２年度 熊本大学教育学部附属小学校

附属小 研究だより

2020.10VOL.56



研究主題

粘り強くともに学ぶ子どもの育成（3年次）

ご挨拶

令和２年７月豪雨，並びに台風９号，１０号により被災された皆様に謹んでお見舞いを申し上げますとともに，一日も早い復旧を心から祈念申し上げます。

さて，各学校におかれましては，コロナ禍のような未曾有の災害下にあっても，子どもたちの学びを保障するという思いで日々の教育活動に取り組んでおられることだと存じます。本校においても，「子どものために最善を尽くす」を合い言葉に，児童の学びの維持と実践研究の推進に努めてまいりました。

８月２２日（土）の午後からオンラインで開催した「夏の実践研修会～『見方･考え方』祭り～」はいかがだったでしょうか。本年度は，新学習指導要領の全面実施に当たり，深い学びの鍵となる「見方・考え方」について各教科主任が熱く語り合う「各教科の特質に応じた見方・考え方シンポジウム」と，講師の先生方をお迎えして「授業の具体で語る見方・考え方分科会」の二部構成と致しました。県内はもとより全国各地から６５０名を超える皆様にお申込いただき，心から感謝申し上げます。ご参会いただいた皆様からは「一つの目的に向かって複数教科を横断的な視点で見ていくシンポジウムは，大変興味深かった。」「具体的な実践をうかがい，授業の中でどんな活動を設定しようかと教材研究への意欲が湧いてきた。」「各種研修会が中止の中，オンライン開催により遠方からでも参加でき大変有意義であった。」「学び多き時間だった。『よし。やるぞっ！』という熱量を分けていただいた。」などの有り難いお言葉をいただき，身の引き締まる思いがしました。一方で，「評価の具体について更に深く知りたい。」「実際の授業の様子をぜひ見たい。」等のご意見・ご要望も頂戴した次第です。

本年度は，昨年度までの文部科学省研究委託事業「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善の推進」を更に進め，各教科等の「資質・能力」を育む学習評価を生かした指導方法の工夫・改善に取り組んでいるところです。本取組の具体につきましては，令和３年２月１９，２０日の研究発表会において，粘り強く学ぶ子どもの姿を通してご提案させていただきたいと考えております。新型コロナウイルスの今後の感染拡大状況によっては，リモート開催となる場合がございますが，多くの皆様にご参会いただき，忌憚のないご意見・ご教示を賜りますようお願い申し上げます。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

熊本大学教育学部附属小学校　副校長　森　毎恵

教科等研究紹介

本年度取り組む研究内容は『各教科等の「資質・能力」を育む学習評価を生かした指導方法の工夫・改善』



研究部長　　中尾 聡志

８月２２日に行いました「夏季実践研修会」には，たくさんのご参加をいただき，誠に感謝いたします。事前申し込みでは，６５０名を超える先生方にお申込みいただくことができ，今回のオンラインでの実践研修会に対する期待の大きさを実感させられました。

今回の実践研テーマは「『見方・考え方』祭り」でした。昨年度の研究サブテーマである「『各教科等の特質に応じた見方・考え方』を働かせる授業の実現をめざして」の研究を通して明らかになった，各教科等の「見方・考え方」についての成果を生かして，今回の実践研を開催いたしました。今回参加された熊本県の先生方からは「とても濃密な研修会でしたね！」といったお誉めの言葉をたくさんいただきました。また，県外の先生方からも，参加してよかったという声をたくさん届けていただきました。特に嬉しかったことが，研究内容に対するご意見やご感想をいただき，それらを基に再度自分たちの研究内容を見つめ直すことができたことです。熊本県内だけでなく，九州各県及び日本全国の先生方と意見交流が即座にできるところに，ＩＣＴを活用した研究会のよさがあるのだと実感しました。

さて，本校研究主題の「粘り強くともに学ぶ子どもの育成」も３年次を迎えました。１年次には「主体的・対話的で深い学び」の具現化を目指し，２年次は上記のとおり各教科等の「見方・考え方」を明らかにしていきました。それらの研究の上に，本年度は「『資質・能力』を育む学習評価を生かした指導方法の工夫・改善」を積み上げていきたいと考えています。

子どもたちにどのような「資質・能力」を身に付けるのかという「学力論」を述べるためには，その力を見取る「評価論」がセットになってきます。３年次の研究をよりよいものとするために，本年度，本校では「評価」と向き合うことが必要だと考えたのです。

しかし，単なる「評価」の研究ではいけません。評価は指導に生かしてこそ，その本来の機能を果たすことができると考えます。その思いも込めて，サブテーマに「指導方法の工夫・改善」という文言を入れました。

「資質・能力」を育む学習評価の在り方を明らかにする際，子どもに育み見取るべきは「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」の３つの柱です。新学習指導要領で子どもに育むことを目指すこの３つの柱には，それぞれ次の言葉が頭に付いています。

⑴「生きて働く」知識・技能
⑵「未知の状況にも対応できる」思考力・判断力・表現力等
⑶「学びを人生や社会に生かそうとする」学びに向かう力・人間性

つまり，評価によって見取るべき対象は，単なる「知識・技能」ではなく，「生きて働く」ものでないといけないのです。「思考力・判断力・表現力等」も「未知の状況に対応できる」ものでないといけないし，「学びに向かう力・人間性」も「学びを人生や社会に生かそうとする」ものでないといけないのです。この「学びに向かう力・人間性」を，実際の授業の中で具体的に評価できるものが「主体的に学習に取り組む態度」なのだと考えます。

以上のような「資質・能力」を見取るために必要な評価とはいったいどのようなものなのでしょうか。さらに，見取ったものを指導に生かすためには，どのような工夫や改善が必要なのでしょうか。本年度，本校ではこの評価を指導方法の工夫・改善に生かすところを深く掘り下げていこうと考えています。

ただ，このコロナ禍によって，研究が思うように進んでいないというのが現状です。けれども，先にも述べた通り，今回のオンラインでの実践研修会を開催したことで，全国の先生方の本校研究に対する強い期待感を実感することができました。求められているものはとても大きいのだと思います。２月の研究発表会では，実際に本校の子どもたちの学ぶ姿を基に，ああでもない，こうでもないと同じ時間，同じ場所で議論・検討できる研究発表会を開催できることを，切に願っております。オンラインのよさを実感しながらも，やはり面と向かっての生の研究会開催を切望しております。たくさんの先生方にご満足していただける研究会になるように，全力を尽くしてまいりますので，よろしくお願い致します。

全体会シンポジウム



１　各教科等の特質に応じた「見方・考え方」とは

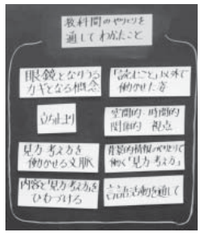
全体会シンポジウムでは，国語，社会，算数，理科，外国語の５教科の教科等主任が各教科等における「見方・考え方」を子どもの姿で語っていきました。例えば，国語科では，キーワードとして「語彙」が挙げられ，自分や他者のもつ語彙の中から，対象を表すのにぴったりの言葉を見いだすときにこそ，見方・考え方が一番働くと説明がありました。子どもたちが言語活動に取り組む中で，何度も言葉の意味や働きなどを問い直していく姿が見えてきます。

それぞれの立場から学習指導要領に示されている「見方･考え方」を子どもの姿に落とし込んで話していったことで，各教科等の「見方・考え方」の共通点と相違点が明らかになっていきました。その中で，「見方・考え方」とは教科等の本質につながるものであり，各教科等の特質があるからこそ，「見方・考え方」にも違いがあるということを具体的に理解することができました。一つの教科ではなく，複数の教科等が同時に「見方・考え方」を語ったことの価値がここにあるのだと思います。

２　子どもたちが「見方・考え方」を働かせる授業づくり

本校の毎床主幹教諭と本校勤務１年目の山平教諭より，子どもたちが「見方・考え方」を働かせる授業づくりについての質問がなされました。共通して言えることは，「見方・考え方」は，「何を」「どのように学ぶ」のかを考える授業づくりの視点であるということです。また，「見方･考え方」を働かせた場面で立ち止まったり，「見方･考え方」を働かせながら課題を解決したことを振り返り，達成感や有用感を実感させたりすることが，働かせた「見方・考え方」の自覚化や次の学びで活用しようとする姿につながることも述べられました。いずれも教科等の本質に迫る内容でした。

３　各教科等の質疑応答



各教科等主任が教科の枠を越えて，各教科等の「見方・考え方」をさらに明らかにし，具体的な子どもの姿について質問し合う，いわば，「見方・考え方」の理解を深める対話が行われました。まず，算数と理科では，「鍵となる概念」と言える「眼鏡」について対話がなされました。具体的には，理科では，植物を「空気」という眼鏡で見たことで，「発芽には空気が必要だ」と学んだ経験が，メダカの呼吸にも「空気」が必要だという生命の共通性の見方として学ぶ手がかりになるということを示されました。一方で，算数科では，図形において，「角」に着目して見たり「辺」に着目して見たりして図形の仲間わけをする具体的な子どもの姿が示されました。「鍵となる概念」と言える「眼鏡」を意識させることが「見方・考え方」を働かせるために重要であるということがわかりました。また，「見方・考え方」を教師が教えようとすると，子どもは自ら「見方・考え方」を働かせないことや，教科の本質に向かう内容と紐づいた授業でこそ子どもたちは「見方・考え方」を自ら働かせていくものになるということが明らかになりました。次に社会，国語，外国語によって，教科や領域を越えて見えてくる各教科における「見方・考え方」の共通性や，「見方・考え方」を働かせたことのよさを実感させる振り返りについての議論が行われました。

４　石井先生からの助言と中尾研究部長によるまとめ



今回のシンポジウムでは，本校研究との４年間のつながりにより，京都大学大学院石井英真准教授にサプライズゲストとしてご出演いただきました。石井先生からは，「授業とは学びへの導入である」という林竹二先生の言葉を用いて，今回のシンポジウムを価値づけていただきました。授業の中で活動や問いに注目していくことで，学校の外側の生活の中でひっかかりが出てくる，それにより，生活をより高次で文化的なものに組み直していくというお話がありました。そのような姿こそ，正に授業の中で働かせた「見方・考え方」で生活を見ていく姿だと思いました。

中尾研究部長によるまとめでは，「新聞」を例に，各教科等の特質に応じて，どのような「見方・考え方」を働かせるかによって授業における新聞の扱いが異なってくることを具体的に示しました。たとえ泥臭くても，教科等の本質を子どもたちがたどることのできる学びを生み出す教材研究を行う力こそが，今，教師に求められる大事な資質・能力なのだという言葉は，参観されていたすべての教師の胸に深く刻まれたことと思います。

５　最後に

Web 会議システムで開催した「見方･考え方祭り」。事後アンケートでは９７％の先生方から高評価をいただき，開催内容と求められるものが合致していたのではないかと考えています。今年度より，小学校では新学習指導要領が全面実施となり，「見方・考え方」を働かせた授業づくりが進められていることと思います。しかし，子どもの姿として，また，授業づくりの視点としての具体が見えにくいというのも事実です。今回のシンポジウムでは，各教科等から子どもの姿を示しながら，その具体を明らかにすることができました。子どもたちを「主体的・対話的で深い学び」に誘うためにも，私たち自身が教師としての「見方・考え方」を働かせて，日々教材や子どもたちと向き合っていかなければならないと感じました。今回の実践研修会での学びを２月の研究発表会に生かしていきたいと思います。

「見方・考え方」を働かせる授業の実現をめざして

算数科分科会

１　数学的な見方・考え方を働かせ，本質を探究する授業へ



「見方・考え方を働かせるためにはどうすればよいのか」という質問を受け，対談序盤に，そもそも子ども達は授業や生活の中で見方・考え方を常に働かせており，特別難しいことを要求されているのではないという共通認識をもちました。ただ，授業では，その時間やその単元において働かせ，広げ・深めるべき見方・考え方があり，それらが働いた瞬間を教師が見取り，価値づける必要があります。授業における子どもたちの姿を基にして教材研究の段階で教師がその教材について深く理解しておくことの重要性が対談を通して明らかになりました。また，これからの授業はどうあるべきかについても話題となり，余宮忠義先生（熊本市立月出小学校教頭）の「パズルのピースを埋める授業ではなく，新しい眼鏡（数学的な見方・考え方）を付け足したり，かけ替えたり，レンズを磨いたりする授業へ転換しないといけませんね。」という言葉から，授業観自体を変えなければならないことが明らかになりました。

２　見方・考え方を働かせた子どもを見取り，価値づけるために

「振り返り」についての質問も多くいただき，「算数日記」や「学びの足跡」についても話題となりました。「算数日記」で学びの過程を振り返らせることで，授業内で見取れなかった新たな問いや思いがそこに表出され，その際に働かせた見方・考え方を一人一人価値づけることで，次時にもつながっていくことを再確認しました。また，働かせた見方・考え方を子どもの名前もあわせて板書や「学びの足跡（壁面掲示）」に残すことで，学習過程を振り返ったときに友だちの名前と発言内容がセットになった物語（授業）として共有できます。そうして，見方・考え方の価値を自覚した子ども達が見方・考え方を自在に働かせ，主体的に算数の本質に向かっていく授業を参観者のみなさんと共有できたと思います。

国語科分科会

１「言葉による見方・考え方」を働かせるとは？



分科会の前半では，「たぬきの糸車」「海の命」を学習材とした研発実践の中で，「言葉による見方・考え方」を働かせた具体的な姿について発表しました。その中で，たぬきが「ぴょんぴょこおどりながら」帰った行動の理由を「おかみさんに助けてもらった」出来事や「おかみさんがのぞいているのに気がつきました」という叙述と関連付けて捉えたり，「海の命」の物語の全体像を「村一番」「一人前」などの言葉の意味に着目して問い直したりする姿こそ，子どもたちが「言葉による見方・考え方」を働かせている具体的な姿であることをお話しました。また，田上貴昭指導主事（熊本県立教育センター）からも，中学校での「短歌」の実践の中で「言葉による見方・考え方」を働かせている姿について具体的に話していただきました。中学校であっても，やはり「言葉にこだわる」ことこそが「言葉による見方・考え方」を働かせるために大切であるというご示唆をいただきました。

２　教材研究と「言葉による見方・考え方」を働かせるための手立て

「言葉による見方・考え方」を働かせるために，岩本龍二指導主事（熊本県教育委員会義務教育課）からは，熊本の学び推進プランの一環として取り組んでいる単元構想案について話していただきました。単元構想案には，本単元で働かせる「見方・考え方」について具体的に記述する欄が設けてあり，まずは授業者自身が教材研究の段階で具体的なイメージをもつことの大切さについてご示唆をいただきました。また，岩本指導主事，田上指導主事，本校教頭井上伸円，研究部長中尾聡志による協議の中で，「言葉による見方・考え方」を働かせるために，学びがいのある言語活動や学習課題を設定すること，さらにはその学習課題を達成するための問いを立てさせることが大きな手立てになることが明らかになりました。

外国語科分科会

１　外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方

参加者の方々から寄せられた事前の質問を受け，「見方・考え方」について，子どもの学びの姿を基に説明しました。例えば，「Hi, what would you like?」「I'd like coffee, please.」というやりとりを，少しかしこまった場を設定してデモンストレーションをすることで，子どもが「レストランで注文する時に使えそう」と英語表現を理解していく様子を紹介しました。

これは，外国語を目的や場面，状況と関連付けて捉えようとしている姿だと考えます。このような見方・考え方を働かせた子どもの具体的な姿をイメージしておくことの大切さを参加者の方々と共有することができました。

２　子どもとともに学びをデザインする



外国語教育における学習過程では，子どもが，設定されたコミュニケーションの目的や場面，状況等を理解するだけでなく，情報や意見を発信するまでの方向性を決定し，単元を見通して学びを進めていくことが求められています。そこで，単元の導入場面で，子どもと教師，子どもと子どもがどのようにかかわり合いながら単元をデザインしていくのか，模擬授業を通して提案しました。教師役と子ども役とでやり取りをしながら，目的や場面，状況に応じて活用できる既習表現を取り上げ，どのような学習活動を行うとよいかを見通す場面でした。参加者の方々から「単元の導入場面で子どもとゴールを共有し，学習過程を一緒に考える具体が見られて大変参考になった。」「教材研究の仕方も，変えていきたいと思った。」という感想をいただきました。園田恭大校長先生（熊本市立桜井小学校）からは，「教師による丁寧な教材研究のもと，教師が大きく構え，子どもの思いや考えを大切に取り入れながら単元をデザインすることで，子どもが主体的に学びに向かうことができる」というお言葉をいただきました。今後は，子どもの学びや指導方法の改善に還元される学習評価についても研究を進め，情報発信を行っていきたいと思います。